

「第23回住まいのリフォームコンクール」総評

本年度の応募作品の大きな特徴は3つある。第1に全体のレベルアップ、第2に団塊の世代の定年退職に伴うリフォーム、第3に本コンクールの中心テーマである「サステナビリティ」の意味の広がりである。

第1のレベルアップは、審査過程でよく分かる。一目見て力不足の作品が少なくなった。これには、一つには応募書式が変更されパソコン利用によって写真の多様な利用が可能になったこと、もう一つには応募総数が増えたことが関連していよう。応募数の増加分の多くは総合部門へのエントリー増となって現れている。リフォームの質が上がり、内容が豊かになってくると、部分リフォームであっても住戸全体を視野に入れるようになり、それを多くの写真で示したくなる。エントリー増は、住戸全体を視野に入れたリフォームへのレベルアップの証左であろう。

特に上位賞では、家具工事専門会社による施工が印象深かった。家具職人の寸法精度・金具の知識・美的感覚は言うに及ばず、その職人魂が空間の完成度をぐっと高めていた。切った・張ったで終わり勝ちな工事の多い現在、その仕事ぶりは大きな警鐘を与えてくれるし、大工職人の側にも良いインパクトを与えてくれるに間違いない。こういう人たちの参加がリフォームの良さと素晴らしさを広めてくれるのは大変に嬉しいことである。

第2は、応募総数増とも関連するのであろうが、団塊世代の大量リタイアのリフォーム元年であることを強く感じた。この世代のリフォームの共通のキーワードにはホテルや和風旅館をイメージするものが目立った。その育ってきた時代背景と憧れといったものが集約されているようである。どちらかといえば、地方の作品のほうが、抑えていた気持ちをリフォームに際して一気に放出したような感じがあり、設計者・施工者の苦労と努力のあとが感じられた。もちろん、子育て世代の苦闘を物語る作品も多い。こちら、設計者・施工者の苦労と努力のあとが感じられた。

第3は、従来は一住戸単位でリフォーム内容が完結していることが多かったが、今年は外部の周辺空間への影響を強く及ぼす作品が目立ち始めた。例えば減築リフォームが増えたのは象徴的である。長く快適に過ごしていくためには、面積を減らしても良いという選択が違和感なくされている。しかも減築によって外部空間や景観にも良い影響を及ぼしている。個別のものであったリフォームが公共の空間の意味を豊かに変えていく流れを強く感じた。これは、空間意識・環境意識の高い団塊世代の改修作品が増えたことと無関係ではなからう。

総じて、サステナブル時代におけるリフォームでは時間をかけることの大切さを強く感じさせられた。「良いリフォームをしたかったら、時間をかけなさい」と言いたい。良いリフォームは次世代にも受け継がれることによって、真にサステナブルになる。

第23回住まいのリフォームコンクール審査委員会

委員長 上杉 啓

